企業

天童市

「自然エネルギーっていいんだな」と心から思う人を増やしたい。

武内 賢二 ソーラーワールド株式会社

取材日 2012.10.03

1997 年創業。「ライフスタイルはローテクがいい、でも使う技術はハイテクで」を企業理念に、自然エネルギー機器の開発・販売・施工専門店として、自然エネルギーの有効活用を中心とする循環型社会づくりのため「自然」「人」「社会」の調和を考え、エネルギーを作り出す方法やエネルギーを有効活用するライフスタイルを提案している。

3月11日　14時46分

将来環境問題に携わりたいと考える離職者を対象にした環境学校が山形市内にある。受講は1年間のカリキュラムで、私は自然エネルギー担当の非常勤講師だ。1ヶ月に1回、朝から夜まで自然エネルギーについて講義をする。受講生は30名ほどで、年代は20代前半から60代までいる。3月11日は1年間の最後の講義の日で、14時46分は残り15分ほどとなり、総まとめの話をしていた時だった。突然、ぐわーっと揺れ出した。ぐらぐらと激しく揺れ、これは只事ではないなと感じた。講義はすぐさま中断した。震源地は仙台だと携帯電話の緊急地震速報で分かり、仙台から来ている受講者もいて「大変だね！」と話しながら即解散になった。今後の話もせずに、とにかく帰宅しようと家路についた。

環境学校から30分ほどかけて自宅に到着した。停電で信号が消えたので、渋滞していた。自宅に着いてすぐに電源を確保した。自宅は太陽光パネルによる独立電源を持っている。天童市は1日半ほど停電したが、太陽光パネルで発電した電気をバッテリーに充電していたので30分ほどで電気が復旧した。すぐにテレビとペレットストーブが使えるようになった。テレビで津波の映像を見て「何なんだこれは！」と衝撃を受けた。

夜になり周囲は真っ暗だった。子どもたちを連れて市内の様子を見に行った。電気がついていたのは病院、市役所の1階、消防署、東北電力の営業所だけだ。そして民家で電気がついたのは私の家だけだったと思う。近所のスーパーマーケット、ホームセンターでは行列ができた。多くの人が食べ物や懐中電灯、乾電池、ホッカイロ、ガスボンベを買い求めた。私も行列に並び「仮設照明が欲しい」と言ったら「停電しているのにですか！？」と店員に驚かれた。居間やトイレなど家中に仮設照明をつけ、ペレットストーブの燃料はストックがたくさんあったので暖房の心配もなかった。水は止まらず、ガスはプロパンガスを使えた。少々不便は感じたが、エネルギー源を持っていたので

ご飯を食べて普通に生活できた。

この辺りは温泉旅館街なのでこうした非常時の場合、非常用電源がついて明るいだろうと想像していたが、実際は発電機が動かなかったようで真っ暗だった。日頃、省エネを意識しているため電気をつけたまま寝る習慣はないが、非常時で真っ暗なのは治安的に良くないと考え、事務所の明かりを外に向けてつけたまま寝た。

電気の重要性を実感

翌日の早朝、事務所のドアの前に人が立っていた。襲われるのかと怖かったが、ドアを開けて声をかけると事情を話してくれた。

その方はたまたま仕事で仙台に来ていた時、地震が起きたそうだ。宿泊していたホテルの従業員に「タクシーで山形に逃げた方が良い」と言われ、真夜中に山形に到着したが宿泊できるホテルはなく、真っ暗な中をさまよい歩いていた。携帯電話の電池は切れてしまい、家族や会社に連絡ができない。ところが1軒だけ電気がついている家を見つけた。なぜだろうと不思議に思い、もしかしたら携帯電話を充電させてもらえるかもしれないと希望を抱いて、朝になるまで外で待っていたとのことだった。携帯電話を充電している間、なぜ電気がついているのか聞かれたので、太陽光パネル

で発電していることを説明した。彼は充電中の携帯電話のワンセグを見て震災の状況を知ったようで、大変驚いていた。充電が終わると、仲間の携帯電話も充電したいと言うので了承した。その話は近所に伝わり、この事務所は携帯電話を充電する人たちでいっぱいになった。電気が回復するまでその対応に追われた。
その後、ガソリンが手に入らなくなった。家からガソリンスタンドは遠いはずなのに、家の前まで行列ができていた。夜中から並び一昼夜を車で過ごす人が大勢いたので、トイレに困るだろうと事務所のドアに貼り紙をしてトイレを開放した。
福島県川内村に住んでいる知り合いから、原発事故が心配なので山形県に避難したいと相談があった。そこで、3月12日から約2か月間、2家族2個人を受け入れて、我が家は避難所として開放した。その後は被災地へ行くボランティアたちの中継地として開放した。交通も麻痺していて突然被災地に入ることは難しかったので、関東から山形を経由して被災3県へ行くボランティアが寝泊まりした。

石巻市の方との出会い

地震が発生してからすぐに被災地の知り合いと連絡をとり、太陽光発電で電力を供給するボランティアをしたいと相談した。土地勘がないので、コーディネートを頼もうと考えた。しかし、現在は遺体捜索も続き非常に混乱しているので、少し様子を見た方がよいとアドバイスをもらった。
地震から1週間後の早朝、事務所にいたら、知らないおばちゃんが血相を変えて突然バタバタと入ってきた。「おおっ！なんだっ！」と驚いていると、息も絶え絶えに「外に立てかけてあるものは何ですか？」と聞く。それは太陽光パネルだと説明すると、突然訪ねた理由を話し始めた。
その方は石巻市の避難所でボランティアをやっていたそうだ。ボランティア活動中、支援をする行政と支援を受ける被災者の間に立って、精神状態がぼろぼろになってしまった。天童市の旅館に勤める息子が被災地にボランティアに行った際に、あまりにも疲れきった母親の姿を見て、せっかく生き残ったのにこのままでは身体を壊してしまうと強制的に天童市に連れてきた。しかし、被災地や避難所のことが気になって、旅館で落ち着いていられず散歩していたところ、ここの太陽光パネルを発見した。被災地では電気が必要なので、パネルを売ってほしいと言う。その時すでに太陽光パネルを被災地に届ける支援をしようと決めていたので、「いつになるかは分からないがガソリンを手に入れたら、絶対にあなたの避難所に届けに行く」と約束した。
地震から10日ほど経過し、相談していた知り合いから「そろそろボランティアを始めよう」と連絡が来たので、すぐに被災地に入ることを決め、支援がスタートした。まずは数日前に約束したおばちゃんの避難所からだ。3月末、石巻市湊中学校へ行き、おばちゃんを探した。太陽光パネルを設置し、資材倉庫を照らす明かりを取り付けた。「おばちゃん！約束したから来たよ」と声をかけると、おばちゃんは「本当に来てくれたんだ！」ととても喜んでくれた。家にあった太陽光パネルの在庫をすべて被災地に届けた。
最初に被災地を訪れた時、戦争の経験はないが、おそらく戦争中はこのような感じだったろうと思った。一帯が瓦礫の山で埋め尽くされ、11tのダンプよりはるか高く積み上げられていた。コンビニの駐車場らしき場所で車を停め、ご飯を炊いて食べた。食欲はなかったが、食べないと体力も気力も続かないと思った。

中学生がボランティアで頼もしく成長

私が被災地へボランティアに行く情報を聞きつけた親戚の中学生が「被災地ボランティアに行きたい」とお願いに来た。テレビでいろいろな惨事を見て、被災地のために何かしたいと言う。「いいよ。ただし被災地ではおんちゃんはお前を子ども扱いしない、1人の男として接するよ」と伝えた。一晩考えなさいと家に帰したが、次の日の早朝「やっぱり僕は行きたい！」とやって来た。
彼にとって焼けた町や自衛隊による遺体捜索の様子は、かなりインパクトがあったようだ。避難所へ行き、太陽光パネルや照明、重いバッテリー、設置するための道具を4階まで運んだ。避難所の係の人にどこに設置してよいかを自分で確認し、照明を取り付ける仕事を任せた。
被災地ボランティア後、中学校でボランティアが

撮影：2011.5.19　陸前高田　金剛寺

テーマの授業があったそうだ。母親が「被災地のことを話したの？」と聞くと「お母さん、被災地の状況は簡単に話していいことじゃないと思う」と答えたそうだ。現場を見て、被災者と触れ合い、中学生の彼なりに学んだことがあったのだと思う。

アニメで子どもたちの心を癒したい

5月のGW、東京のヨーロッパアニメの配信会社から上映会「こどもアニメキャラバン」の話があり、開催の協力をした。「きかんしゃトーマス」のライブ吹き替え上映で声優を務める女優の戸田恵子さんと一緒に、陸前高田市、釜石市、野田村の幼稚園や保育園へ行った。被災地ではきっと子どもたちが心に傷を負っているだろうと思い、アニメを見ながら少しでも心を和ませて欲しかった。映像を流すには電源がいるので、太陽光パネルを設置し発電して電気を賄った。スクリーンはシーツを縫い合わせた手作りだ。

私の子どもたちはリアルタイムで津波の映像を見たが、映画を見る感覚で全く驚かなかった。子どもたちにとって津波の映像はあまりにも現実味がなかった。周囲の人たちが大変なことになったと言っても、「僕たち、もうその映像見たよ！」と事の重大さを理解できなかった。このままではいけないと感じ、「こどもアニメキャラバン」活動の際に被災地へ連れて行った。子どもたちに被災地を見せ、上映会では手回し発電でわたあめを作る仕事をやらせた。その後は被災地の話をする時は､子どもなりに言葉を考えて話すようになった。あまりにも多くのことがあった怒涛の1年半で、よく覚えていない。これまで合計で約250か所、太陽光パネルに換算すると約2,200枚の支援を行った。

自然エネルギーを実感する場を提供したい

さまざまな被災地で支援活動を行ない、現在浮き彫りになったエネルギー問題は被災地と被災地ではない地域を別々に考える必要があると感じた。被災者はエネルギーよりも明日の生活をどうするかの問題が先決で、生きる、生活するための手助けが必要だ。将来は地域づくりにおいて自然エネルギーを考えてほしいと思い支援活動をしていたので、自然エネルギーの勉強会などの開催も考えていた。しかし、被災地では生きる活力を見出そうとしている人たちばかりなので、エネルギーの話はピンと来ない。いずれは被災地でも動かなければならないが、今はそのタイミングではないと感じている。

一方、被災地ではない地域は自然エネルギーについてもっと議論を行なうべきだと考える。3月11日以降、我々の方向性を考え直さなければならない時代にきたのではないか。2011年6月、環境学校の卒業式に非常勤講師として出席した。地震で揺れている時はエネルギー問題がこうして新たな局面を迎えるとは思わなかった。卒業生からの1年間の感想で、自然エネルギーの最後の講義中に地震が起きて、その後原発が爆発してエネルギー問題が浮き彫りになったことは、自分自身が時代のターニングポイントにいたと感じるとコメントがあった。私自身も人生の重要なターニングポイントであったと感じている。

私たちは震災によって電気がないと何もできないという生きる上で貴重な経験をした。あの経験を未来の生活へ活かすために、「自然エネルギーを使わなくてはならない！」と思うレベルまで人々の意識を変えていきたい。震災以前からエネルギー教育や環境教育をしてきたが、実現性と人々に訴えかける方法を検討し、私たちが窓口をより広げて取り組む必要があると思う。太陽光パネルを被災地へ持って行っても、「太陽光パネルってこんなに使えるの？」と自然エネルギーの力を知らない人ばかりだった。話を聞くと震災以前は全くエネルギーについて関心がなかったし、ましてやこんな事故が起きるとは想像すらできなかったと、多くの人が口を揃える。我々はこれまで自然エネルギーで社会をシフトしようと動いてきたのに、ちっとも変わっていなかった。もっと社会が気づいていれば、原発事故にもう少し違った対応ができたかもしれない。一般市民が自然エネルギーについて考えるよう訴えかけられなかったことは、やり方も含め反省すべきだと思った。

これから一般の方々にどう訴えるかを模索していきたい。例えば、皆の目に触れる場所に自然エネルギーを設置して、実感できる場や機会を提供しなければならない。自然エネルギーが良いものだと頭では分かっていても実際に周りに太陽光パネルがなければ、その本当の良さは想像すらできな

撮影：2011.6.4　石巻市大宮神社　地域の避難所

いし、自分たちの未来に取り入れる考えは当然生まれない。これまでのように講座も大事だが、もっと見て触れて使って「自然エネルギーっていいんだな」と心から思う人を増やしたい。見る、触る体験の場を仕掛けていくのは自分の役割だと感じている。先々週、コンサートのサブステージの電源を10時から21時まで100％太陽光エネルギーでまかなった。コンサートなので集客があり、エネルギーや環境に興味のない人まで「太陽光電池って意外と使える！」と体感してもらえるチャンスだ。そうした体験をした人は他の場所で誰かに話してくれるかもしれない。今までの視点とは違った、自然エネルギーを身近に感じられる場を作っていきたい。

行政

高畠町

避難者に寄り添いたい。他人事をいかに自分事にできるかが大切。

村上 奈美子 高畠町生活環境課

取材日 2012.10.05

高畠町は山形県置賜地方の東部に位置する。奥羽の山なみ深くに源流をもつ屋代川、和田川の扇状地に拓けた稔り豊かな美しい町。地味豊かな土地で稲作の他、さくらんぼ、ぶどう、りんご、ラ・フランスなどの果物も生産されている。東日本大震災で大きな被害はなかったものの、被災地から多くの避難者を受け入れ、宮城県からの火葬の受け入れを行なった。

3月11日　14時46分

役所で仕事中に「あ、地震だ」と気づいた。最初はそれほど大きくないと思ったが、次第に揺れが大きくなった。ガタガタと細かい揺れではなく、ゆらゆらと大きい揺れだ。書類や物は落ちないが、なかなか終わらない。おそらく2～3分だが、とても長く感じた。すぐに停電になったので一斉放送などの避難の呼びかけはなかったが、庁舎は築40年で崩れる危険性があると各自が判断して外へ避難した。外に出て庁舎を見ると、今にも崩れそうだ。電線はぐわんぐわんと波打ち、駐車場の車はトランポリンに乗っているかのように飛び上がっていた。何度も余震がきたので、庁舎に出たり入ったりした。並大抵の地震ではないと思ったが、いったい何が起きたのか分からなかった。停電でテレビは映らず情報が入らない。携帯電話のワンセグで宮城県沖が震源だとようやく分かったが、他の県の状況は全く分からなかった。

15時半過ぎ、大きな揺れが落ち着いたので、各公共施設など防災担当地区の被害状況を確認した。生活環境課は火葬場も担当施設だ。電気が付かないので、火葬場は真っ暗だった。慌てていたため懐中電灯を持ってくるのを忘れてしまった。火葬場にはろうそくがたくさんあるので、ろうそくを使って被害の状況を確認した。

余震がきてもすぐに逃げられるように役所の隣の中央公民館1階に対策本部を設置した。高畠町は建設クラブと防災協定を結んでいるため、発電機を持って駆け付けてくれて、情報収集等に必要な

電力を確保できた。

役所に戻ると、職員は情報収集で混乱していた。このままでは職員も帰れそうにない。地震後すぐに設置された災害対策本部に炊き出しの必要性を確認し、できる職員が自主的に炊き出しにまわった。緊急時の割り当てで住民対応窓口の課が炊き出し担当だったが、明確な指示がでなかったため、機能せず自主的に残った職員で対応することとなった。生活環境課では講座などで大人数の試食づくりを行なった経験があるので段取りは分かる。まずは米屋や個人商店を回って、炊き出し用の食料をかき集めた。ホームセンターやスーパーマーケットは水やコンロを買う人で混雑し、商品はあっという間に売り切れた。スーパーマーケットなどの混雑を予想し、個人商店に買い物に来た人も見受けられた。